

目的 我国の各地に保存・保管されているアイヌ民族服飾資料を、保存科学的並びに服飾文化史的見地から、総合的に研究を行うことを最終目的として、継続的に調査研究を実施している。本研究では、その一部として蝦夷錦について、織物構造上の特徴を明らかにする。因みに、蝦夷錦は、江戸時代の文化を彩った絹織物の一種であり、清朝の影響下にある黒龍江下流域の少数民族とアイヌとの山丹交易による品、あるいは清朝へのアイヌの朝貢に対する下賜品であり、歴史的意義を持つ織物である。

方法 資料は、北海道開拓記念館所蔵の蝦夷錦のうちの5点である。織物構造上の形態観察は、CUP-M3型カラービデオプリンター（ソニー製）を接続したVH-6110型ハイパーマイクロスコープ（キーエンス製）を用いて測定した。また、採取可能な試料についてのみJSMT-300型走査型電子顕微鏡（JEOL製）を用い、SEMから測定した。

結果 資料の表地は、文様部分を数種の色糸を使って織り表した絹織物である。文様部分に用いられている色糸の素材は全て絹糸で、糸の見掛けの直径は、0.29～0.93 mmで文様の図柄に合わせて糸の太さが工夫されている。また、金属糸は箔の幅0.46～0.94 mmの撚金（丸撚、蛇腹撚）、平金が意匠的に用いられている。地組織は平織、変化平織（綴れ、横畝）、朱子織、からみ織（紹）である。織糸密度は、平織の縦21.7～36.0本/cm横15.3～50.0本/cm、綴れ織の縦21.0本/cm横36.0本/cm、横畝織の縦40.7本/cm横27.3本/cm、朱子織の縦89.0～120.0本/cm横40.0～49.0本/cm、紹織の縦24.0～36.0本/cm横9.7～16.3本/cmで、それぞれの組織による特徴が表れている。